

審査講評

平成22年度 北海道赤レンガ建築奨励賞「下川町環境共生型モデル住宅 美桑」

市街地から離れた山間の奥深く、木々に囲まれた平地と傾斜地が「美桑」の敷地である。環境省が全国20ヶ所で募集したエコモデル住宅のプロジェクトに、北海道内から下川町と美幌町が手を上げた。そのひとつがこのプロジェクトで、設計コンペで最優秀賞に選ばれた案をベースにし、3月末に完成した。8月の結果発表から完成までわずか7ヶ月。しかも、施工期間が北海道の豪雪と極寒の期にあたる。この困難な条件下で実現されたこのモデル住宅は、複雑なファクターを読み解き、住宅規模でありながら、社会性を持った建築としての完成度を持つことができている。

下川町は、林業を軸にしたプロジェクトを継続してきている。植林事業から炭事業に至るまで、森の循環をテーマに種々な取り組みをしてきた町である。台風による風倒木を炭にするプロジェクトから始まった取り組みは、現在でも人材育成も視野に入れた、長期的な戦略として展開している。

今回の施設は、そうした戦略の上にある木造のモデル住宅として位置付けられている。住宅として計画されているが、地域の木造のモデル住宅として、宿泊体験やセミナーもできる施設として機能している。

北海道の木造住宅が技術的な意味で完成度が高くなったのは、近年の事である。寒さや豪雪という条件課題の克服を経て、地域らしい暮しや、空間の豊かさに人々の関心や価値がシフトし始めている。

徹底的に使用された、下川町地場産材は、構造材から仕上材、障子の紙にまで至る。時間との戦いの中で行われた材料の選択は、その努力の結果が報われていると感じた。

外周部で徹底的に断熱し、内部を開放的に空間として連続させる手法は、近年可能となってきた空間の創り方だが、モデルハウスとしての回遊性や、宿泊も含めた施設利用と矛盾せず、魅力的な空間となっている。

傾斜地でもある敷地条件への建築構成による解決が結果として、周辺の大きなトドマツの森との生活を豊かに関係づける事につながっている。

全国の20ヶ所のエコモデル住宅の多くが、ソーラーパネルなどの装置に頼る計画であるのに比して、この施設計画の持つ解答は群を抜いている。北海道、地域のモデルを超えた評価が出来ると感じるプロジェクトとして、下川町の取り組み、悪条件下の施工と合わせ、赤レンガ建築賞奨励賞に値する。

(北海道赤レンガ建築賞審査委員長 大野 仰一)